



にしきぎの枝は刃だらけ利休の忌  
 さくらさくら全て残像かもしれぬ  
 古草に風よく透る柞山  
 ファシズムに聞き耳立てよつくしんぼ  
 うぐひす餅つまみて大概は許す  
 砂を吐く蜆仏のごと薄目  
 啓蟄やいつか来る死は一度きり  
 おほどかな母の子育て釈迦の耳  
 養花天楽して心弱くなる  
 我が前世春蚕なりしや絹が好き  
 爆音の残る春空ねばねばす  
 ぶらんこの子に見えてゐる空の果  
 桜の芽札所めぐりの兜太の地

\*  
 一喝のあとはかよわし春の雷  
 融けはじめたる春雪の腥き

小林貴子  
 岩井かりん  
 清水追径  
 栗原利代子  
 宮岡光子  
 小池孝雄  
 丸山貴史  
 坂田寿美  
 太田継子  
 鈴木春子  
 河西久恵  
 金井光  
 黒坂愛子  
 佐藤恵子  
 宮坂やよい

無駄なこと一つもなくて蝮の道  
 すれちがふものは幻さくらの夜  
 春惜しむ青く透きゐる夜の道  
 子別れの鶴の親子をかなしまず  
 吉備国にう温羅の伝説黄砂降る  
 骨寺村いにしへのごと畦を塗る  
 小鳥待つ椅子の木目や春深し  
 ばつけ摘みだんだん欲が深くなる  
 三月のマルシェへ届くのらぼう菜  
 鷹化して鳩となるあんな誰  
 春の月ちやうちんと呼ぶ焼鳥を  
 江戸の春描き彫り摺る浮世絵展  
 鬱う葱や辛夷の花は樹の灯し  
 芹濯ぐ手に水搔の名残かな  
 草取りの手強き相手ゲエロッパ

山田春草  
 長島環  
 曾根原とうこ  
 横地妙子  
 松本京子  
 千葉任子  
 田村道子  
 菅原砂登子  
 服部美智子  
 高橋秀雄  
 垂井霜葉  
 青木迪子  
 小熊里利  
 松澤あきら  
 原隆子

巻頭寸言 いまさら「自分の俳句は発句か俳句か」と自分に問うても意味がないと思われるが、意外に大事である。以前書いたものを読み返す。大方忘れていた。私は、「俳句の発句—正岡子規の連句観」を書いた（「俳句」昭和五十三年三月）。私の子規論の嚆矢である。そこでは子規が俳句詩型を確立したとみなされる明治三十二年に、同時に「連句」を高く評価していることを指摘した（『俳諧三佳書』序「これ程面白い者ならば自分も連句をやつて見たい」）。子規の中では当初の俳句観（「連俳は文学に非ず」・「芭蕉雑談」明治二十八年）が変貌する時であった。

見るとは発見に繋げる観察力を——にしきぎの枝の不思議を

にしきぎの枝は刃だらけ利休の忌 小林 貴子

秋の紅葉は錦木、炎が燃えたつごとし。ところが春の新緑は目立たない。不思議はその枝にコルク質の翼のような硬い翅があること。これを「刃」と見た。見立てがユニーク。利休忌は旧暦二月二十八日（新暦で四月二十一日）。秀吉に自刃させられた無念の生涯はどこかで錦木に通う。

古草に風よく透る 柞山 清水 道徑

柞山は櫟や榎の山。母音a音の響きがやさしい。冬枯れの残る春先の柞山の光景は、老いを意識しだした者には惹かれるものがある。根元はいまだ芽吹かない古草が覆い、日が当たり、風が透る。どうということがないのがいい。

げば、あとはお釈迦様が見てくれたもの。わが子を虐待する時世とは違ふ。

養花 天楽して心弱くなる 太田 継子

苦労性ではなく、真実である。心を鍛えるには苦労を背負うこと。これが長老九十三歳の現役の歯科医である作者の処世訓、いや人生訓であろう。後世への遺言。迫力がある。

我が前世春蚕なりしや絹が好き 鈴木 春子

お洒落でかわいらしい句。名は「春子」もなるほど。

爆音の残る春空ねばねばす 河西 久恵

飛行機の爆音が過ぎた後の音感からくる触感、広く体感か。「ねばねば」は嫌な感じ。気になるばかりではなく、不安を掻き立てる。世界の局地戦争が地球上に拡がるような。男は鈍感、女性の敏感さである。

今月の秀句

さくらさくら全て残像かもしれぬ 岩井かりん

さくらを見る。満開。しかし、印象として残るのは毎年見続けてきた漠然としたさくらの記憶ではないか。あるところで珍しく見た石楠花の印象とは違う。見るとは不思議な行為だと思う。「さくらさくら」の唱歌も頭の中の残像を手繰りよせている。いわれると当然のような気がするが、しっかり言った人が記憶される。言葉の芸術は早いか巧みにかが勝負。

ファシズムに聞き耳立てよつくしんぼ 栗原利代子  
世界はつねにファシズムがうごめく。春先の土筆に呼びかける地面からの発想に作者の優れた資質が伺われる。

うぐひす餅つまみて大概は許す 宮岡 光子  
小学生にいつているのではない。作者の生き方に関わる、許す、許さないとは、うぐいす餅が出る日常の家庭内の人間同士の話か。「大概」とは余裕である。知性が働き、生きるバランス感覚がいい。

砂を吐く蜺仏のごと薄目 小池 孝雄  
台所のボウルの中で、観念している蜺。半眼を思わせる「仏のごと」にかすかなユーモアもある。お陀仏お陀仏。

啓蟄やいつか来る死は一度きり 丸山 貴史  
地虫が地中から出てくる春先に「死は一度きり」と思った。蟬の幼虫を瞥見したものか。十二音のフレーズは聞くことがあるが、萌え出る春を控えての感慨に重さがある。惹かれる。

おほどかな母の子育て釈迦の耳 坂田 寿美  
「釈迦の耳」とは二月十五日の涅槃会の供物。米の粉などで物づくりをする。粉を握った形が瘦馬。地域により「釈迦の耳」という。「岳」同人であった岡村光代に句集『釈迦の耳』がある。一昔前の母の子育ては「おほどか」。愛情を注

ぶらんこの子に見えてゐる空の果 金井 光

大人がぶらんこに乗っても見えるのは目先だけ。口には出さなくても子には未来を見る第六感があるろう。ことばにできない未来からの囁きもある。

桜の芽札所めぐりの兜太の地 黒坂 愛子

秩父観音札所三十四カ所巡り。兜太逝去後、もう六年が経つ。愛子、やあいらっしやいと、今や兜太は故郷秩父の札所の案内人を買って出ている。秩父のどこかにいるはずである。

融けはじめの春雪の腥さ—鋭い生きもの感覚

融けはじめたる春雪の腥さ 宮坂やよい

真っ白い雪は無臭。ところが春先に融けはじめるときの雪の腥さとは、知る人ぞ知る不思議。生きものめいた雪が生き生きと捉えられている。自分の中にある生臭さが雪解けの雪にもある発見。自然、宇宙と繋がるアニミズムの萌芽ともいえる。

無駄なこと一つもなくて蜷の道 山田 春章

田植が済み、早苗が根づいた田には蜷が動きまわる。その痕が蜷の道だ。自在に動くように見えながら無駄がない。私には無駄ばかりと見えるが、肯定した見方に説得力があるろう。蜷の方が人間を超えている。

すれちがふものは幻さくらの夜 長島 環

夜桜を見てさまよう。妖気が漂い、人もすれ違ふが輪郭が

臚。実体よりも翳が本体のようだ。「幻」と大づかみに捉える。なぜ夜桜に誘われるのか。勝手な想像を記すならば、人は幻気分になりたい。人は昼間の輪郭を崩したい思いがあるのではないか。

春惜しむ青く透きぬる夜の道 曾根原とうこ

二十五歳の上田の新進。田中純子門下。初投句である。晩春、春が過ぎてゆく、夜道の直感が「青く透きぬる」。地面におろす足元が透ける感覚とは新鮮だ。こんなに幻想がたっぷりな表現は久しぶり。どんどん思いをぶつけてみよう。

子別れの鶴の親子をかなしませ 横地 妙子

釧路湿原を背景に鶴の親子の別れ。かなしむならば類想。「かなしませ」と情を超えた知的表現の判断に感銘した。広い北国の虚空が連想されよう。長年の研鑽のたまもの。巧い。

### 今月の秀句

一喝のあとと嬌し春の雷 佐藤 恵子

突然「ごろごろ」と来た後、急に弱弱しい春の雷を「嬌し」と捉えた生きものの感覚がすばらしい。春の雷は女性のようなとの直観があるう。こんな身近な春雷の捉え方は初めてである。俳句は自我表現ではなく、自分は春雷を生かすために奉仕しているようだという作者の自我のあり方が、俳句の見方を大きくしている。作者などが加わる栃木グループの学びの場が大らかなのであろう。

鷹化して鳩となるあんた誰 高橋 秀雄

作者は大学生時代に俳句業師であった。ここに再登場。往年の作をあげる。(主殿はや啓蟄にてござりまする)。愛知県の高校の先生であった。

「鷹化して鳩となる」は啓蟄の三候(三月十六日から二十日頃まで)をいう。掲句は、猛禽鷹が穏やかな鳩になる。冬が過ぎ、春になる、気候の変わりようを踏まえ、突然、人事詠に転じる、開き直り。例えば、勇ましい校長が俄かに変身、温和な好々爺然となる。みんな啞然として「あんた誰」。

春の月ちやうちんと呼ぶ焼鳥を 垂井 霜葉

鳥の内臓のきんかんとひもを串に刺して焼いた珍しい料理を焼鳥ちやうちんと呼ぶ由。高山の霜葉でなければ気づかない贅沢。春の月がいい。明るく楽しい。ともかく、ようやく讃えるべき句ができてうれしい。いつかいつかと、霜葉の開眼を待っていたのである。住斗南子亡き後、伊藤木公ともども、岸元忠義事務局長を軸に奮闘していただきたい。斗南子時代、高山は「岳」の主峰であった。

江戸の春描き彫り摺る浮世絵展 青木 迪子

浮世絵展を見た囁目詠。動詞「描き彫り摺る」の一語一語が浮世絵を完成する順序になっている。動きがある。令和ではない「江戸の春」も、浮世ばなれの楽しさがあるう。

鬱葱や辛夷の花は樹の灯し 小熊 里利

樹木が茂るさまを「鬱葱」という。中でも辛夷は文字通り指標花。灯をともしている。辛夷の花片は北を指して咲く。

吉備国に温羅の伝説黄砂降る 松本 京子

岡山吉備地域に伝わる温羅と呼ばれる鬼を吉備津彦命が退治する伝説は周知である。桃太郎伝説も絡む。伝説たっぶりの地を先年お訪ねして、吉備団子も頂戴し、吉備津の釜が鳴るまで粘ったのも木材になり、ありがたかった。大陸から来る黄砂の降る日が連想を広げてみよう。

骨寺村いにしへのごと畦を塗る 千葉 任子

岩手山中、骨寺村の呼称にびっくり。樹木葬の盛んな村だ。畦塗が行われる。一切が「いにしへ」スタイルに感じ入る。

小鳥待つ椅子の木目や春深し 田村 道子

ことばに人臭がない。詩人としての修練の期間が長く、俳句臭がない。近年ようやく、一つの表現として定着しつつある。掲句がそれである。季節も晩春の俳句旧来の情緒が少ない。あまり季節感を感じない、さらっとした場の設定だ。

ばつげ摘みだんだん欲が深くなる 菅原砂登子

作者は花巻市在住。露の臺を東北地域では「ばつげ」「ばんかい」「ばっかい」。アイヌ語では「ばはかい」。全国に方言が多い。摘めば摘むほど欲深くなる。もともとことは人間の業欲。たかが、ばつげくらいにと、自身もおかしみを感じている。

三月のマルシェへ届くのらぼう菜 服部美智子

「マルシェ」はフランス語の市場。初句からの十二音がらるん、軽い。下五「のらぼう菜」で抑える。リズムがいい。

道に迷ったときには辛夷の花を見るといいという。辛夷はいち早く咲き、他の樹木の最盛期はまだこれから。一つの目安、絵のような構図を描いた句であろう。

芹濯ぐ手に水掻の名残かな 松澤あきら

なるほど。鳥の水掻を連想させる進化の痕跡が人間は手にある。清冽な春先、芹を濯ぎながら、わが手を見つめた。ふと、進化を思えば、人間の先はいかように進化するのか。いや退化しかないのでは。そんなことを思わせる昨今だ。

草取りの手強き相手ゲエロッパ 原 隆子

原句は下句が「オオバコよ」とあった。注に「俗名ゲエロッパ」とある。ここは原句オオバコよりも注の俗名(方言)が面白い。よって置換した次第。取っても取っても生える根強さよ。しつこさがすばらしい。俳句も同じ。

他に推薦候補作を掲げる。

書肆にゐる森のしづけさ暮の春	奥山 源丘
晩節も確と未来や花吹雪	堤 保徳
菜の花畑何か忘れてきし思ひ	矢島 恵
砂浜は人恋ふところ啄木忌	後藤 牙子
友達になりたき地虫出てにけり	岩上 諒磨
此方ペタンクすし離れて石鹼玉	我妻 民雄
浜茹での若布や風もみどりなす	宮沢 久子
春泥や人は地べたに生くるもの	志摩 晴樹
臘夜の病院まるでラビリンス	古畑富美江